

梅毒末期の精神錯乱を マラリヤ感染で治療せよ！

かつて精神疾患、特に統合失調症は不治の病と見なされ、有効な治療法が存在しませんでした。そのため今日の視点からすると、多くの奇妙な「治療法」が考案されては姿を消していきました。そうした中で、さまざまな方法で施行されたのが、いわゆる「シヨック療法」です。この治療法は、精神疾患の混乱した「脳」に強い衝撃を与えれば回復するかもしれないという、根拠のない仮説から生まれたものでした。シヨック療法の中で、現在まで形を変えて生き残っているものに電気シヨック療法が挙げられますが、今回の連載のテーマとしては、発熱療法の一つである「マラリヤ療法」を取り上げましょう。マラリヤはマラリヤ原虫によって発症する感染症で、熱帯から亜熱帯に広く分布しているもの。マラリヤは断続的に出現する高熱を特徴とし、適切な治療を行わな

いと死に至ることもある重大な疾患です。高熱が精神疾患を改善させるケースのあることは、ギリシア・ローマ時代から知られていました。19世紀の中盤には、腸チフスやコレラ、ジフテリアなどの感染症によって精神症状が改善したことが報告されています。マラリヤ療法は、マラリヤに人為的に感染させ、その時に生じる高熱によって精神疾患の症状を改善させようというものでした。この治療法は、オーストリアの医師ヤウレックによって研究が進められ、彼はマラリヤ療法が「進行麻痺」という精神疾患に有効であることを発見しました。この治療法が考案された当時、進行麻痺は精神科の扱う重要な疾患でした。

進行麻痺とは、性病である梅毒の末期状態です。

東京裁判は昭和21年5月3日に始まり、2年間で審理を終了、同23年11月4日から翌年2月にかけて判決申し渡しが行われました。そうしたなか大川は、精神疾患のため免訴の扱いを受けます。特に大川の「病気」が注目されたのは、公判第1日目の法廷における異常行動によってでした。大川は水色のパジャマを着用し、素足に下駄を履いて出廷。開廷後、起訴状の朗読が始まったとき大川は、自分の席の前に腰を下ろしていた東条英機の禿げ頭を平手でピシヤリと叩き、さらに東条のメモをひたたくって、もう一度叩いてみせます。裁判長のウェップは休廷を宣言、しかし大川はこれに抗議をするように奇声を上げたため、ついに憲兵によって外に連れ出されてしまうのです。

その後の大川は東大病院に入院、東大教授・内村祐之らによって精神鑑定が行われました。東大病院における検査で大川は梅毒の感染が確認され、進行麻痺との診断が下ります。その結果、同病院において1回目のマラリヤ療法を受けることとなるわけですが、さらに松沢病院に転院となつてから2度目のマラリヤ療法を受けますが、その後の入院生活の中でイスラム教の聖典であるコーラン全文の翻訳という偉業を成し遂げています。

さてここで、進行麻痺という疾患について少し説明しておきましょう。

進行麻痺は、梅毒の病原体である梅毒トレポネーマ（スピロヘータ）に起因する精神疾患です。進行麻痺は、梅毒感染後に数年から数十年の潜伏期を経て発病し、感染者のうち進行麻痺に進展するものは5〜10%程度といわれています。進行麻痺の患者の脳には梅毒トレポネーマが存在し、脳実質の崩壊による脳萎縮が認められます。かつて進行麻痺は治療

精神異学

忘れられた治療法



illustration Naoto kawashima



「精神異学」
マラリヤ療法

20世紀初頭に行われた、精神疾患に対する発熱療法の一つで、患者を意図的にマラリヤに感染させるもの。感染方法としては、マラリヤ患者の血液を静脈注射して行なう。その結果、患者はマラリヤ感染、その40度あまりの高熱によって、梅毒の末期症状である進行麻痺が改善することもあった。この治療法は日本で行われ、戦前右翼であり思想家の大物、大川周明が受けたことでも知られている。

す。マラリヤ療法を考案したヤウレックは、この治療法の開発の功績によってノーベル医学賞を受賞していますが、本稿では、興味深い例として、進行麻痺に罹患してマラリヤ治療を受けたわが国有名な思想家、大川周明の経過を紹介してみよう。

大川周明は戦前の思想家で、日本軍国主義を代表する国粹主義的なイデオログと見なされてきた

梅毒の病原体が脳を侵すことによって、統合失調症や認知症に似たさまざまな精神症状が出現します。抗生物質が開発された現在、梅毒の治療は容易になりましたが、当時は治療が困難な疾患で、改善しないまま慢性に経過して死に至るケースが少なからず見られました。20世紀の初期には、精神科に入院している患者の実に2割あまりが進行麻痺だったというデータも残っています。

マラリヤ療法の実際的方法としては、マラリヤに罹患している患者の血液を進行麻痺の患者に静脈注射します。その後、数日の潜伏期の後に発熱が開始。40度あまりの高熱を一日おきに10回程度反復させ1クールとし、その後マラリヤの治療薬を投与します。治療効果は、患者の50〜60%で認められたといま

法のない疾患であり、統合失調症、躁うつ病、てんかんと並んで、四大精神病の一つとされていました。進行麻痺の精神症状の中心は、人格変化と知能低下です。さらに、躁うつ病あるいは統合失調症に類似した精神症状が出現することもありました。そうした進行麻痺に対して、熱により病原体の死滅を図るマラリヤ療法は、確かに画期的な治療法ではあったわけです。

東大病院での大川の記録を見てみましょう。あるとき診察室に導かれた大川は、周囲の人々に会釈することもなく無遠慮に椅子に腰を下ろし、なれなれしい態度で早口に多弁に話し始めました。振る舞いは傲慢でしたが、その話しぶりは実に流暢、他人に対しては遠慮なく悪口を述べ、自分が天下第一の人物であると自任していました。日本語に英語、ドイツ語を縦横に交え話題は豊富、容易に次から次へと転々し、結論まで到達しないうちにほかに話題が転ずることたびたびであったといえます。このような大川の状態は、典型的な「躁状態」といえます。躁状態においては気分が爽快で上機嫌となり、さらに多弁多動で話題が次々と転換します。けれども些細な刺激に反応して不機嫌となりやすく、実際大川も、強い言葉で反論することもあったとか。さらに彼には誇大妄想も見られています。彼の言葉を引いてみましょう。

「自分は、医学博士で理学博士で工学博士だ。ノーベル賞をもう三度も貰った。テーマは古いことだから忘れて了った。原子爆弾も頭の中にチャンと出来てる」
「僕は水の上を歩くことも出来る。身体の中の空気を真空にしておけばよいのだ。キリストが水の上を歩いたのなんぞ全く楽な話さ」
このような状態の大川でしたが、2度の発熱療法

によって、なんと症状は一変します。回復後に大川は、自分の状態について次のように述べています。「酒に酔って居た様なものです。しかし酒では西郷になつたり明治天皇になつたりしませんでしたから酒とも少し違いますな」

「この数カ月の間、私は実に不思議な夢を見続けた。私はその夢の内容を半ば以上は明瞭に記憶している。然るにこの夢は、松沢病院に移るとほとんど同時に覚めてしまった。夢が覚めたということは、乱心が鎮まったということである」

最終的に大川は、昭和23年の春、GHQから起訴しないとの通告を受けます。釈放された大川は、進行麻痺の再発もなく、また統合失調症で見られるような「欠陥状態」を示すこともなく、神奈川県愛甲郡の自宅で静かな学生生活を送り、昭和32年に亡くなっています。マラリヤ療法は戦後しばらくの間は施行されていましたが、抗生物質の普及と共に過去の治療法となつていきます。生命の危険が迫った状態において精神症状が目覚ましく回復することがあるとはよくいわれますが、実際臨床の現場では、そのようなケースにしばしば遭遇するものです。このマラリヤ療法も、かなり身体的リスクの高いものでした。現在の視点からすると倫理的に問題のある治療法でしょうが、当時においては画期的なものであったこともまた事実なのです。

【参考文献】吉益信夫、内村祐之監修『日本の精神医学』（みすず書房、1973年）

岩波明（いわなみ・あきら）
1959年、神奈川県生まれ。精神科医。東京大学医学部卒。都立松沢病院をはじめ多くの精神科医療機関で診療に当たり、現在、昭和大学医学部精神医学講座教授にして、昭和大学附属島山病院の院長も兼務。近著に「発達障害」（文春新書）などがあり、精神科医療における現場の実態や問題を発信し続けている。